

第38回研究論文集発刊に寄せて

審査委員長

菊池 龍三郎

1. 審査経過

今年度の応募論文数は全部で89点で、昨年に比べ若干減りましたが、一方で注目すべき変化がありました。それは高等学校から5点も応募があったこと、学校教育だけでなく社会教育施設である青年の家からも応募があったことなど、教育論文の応募者の範囲が広がったことで、これは大変喜ばしいことと受け止めております。

10月22日から12月16日までの約2ヶ月をかけて、審査委員全員で全89点について第一次審査、第二次審査を行い、最優秀賞1点、優秀賞6点、優良賞17点を決定しました。

2. 講評

(1) 受賞論文の教科別分野別広がり・・・社会科が少ないことが心配

今年度の受賞論文を教科別・領域別に見ると、国語科と算数・数学科が最も多く、それ以外には理科、学級経営、道徳、教育課程、学級活動、美術科、特別支援、部活動などでした。これを研究の観点という面から見ると、評価、学習指導、小中一貫、言語活動、社会性の育成、「読み」の充実、ユニバーサルデザイン、学び合いの場づくり、思考過程の可視化の工夫、金融教育、地域とのつながり、国際交流等々と広がりが見られました。ただし、教科の面では社会科の応募が少ないことに審査委員一同が残念に思いました。児童生徒の社会的・歴史的・公民的認識の形成に先生方の関心や情熱が薄れてはならないはずなのになぜ研究論文の応募という形で表われてこないのか疑問に思っていることを紹介しておきたいと思います。

(2) 最優秀賞論文の概要

ここで、最優秀賞を受けられた日立市立榊形小学校教諭の正木啓道先生の「粒子概念を形成し、微視的な見方・考え方を育てる授業－問題解決学習、具体的・操作的・体験的活動を通して－」について、簡単に紹介しておきます。

先生の研究の背景にあるのは、わが国の成長を支えてきたすぐれた科学技術の基盤が実際には浅いのではないかという危機感であろうと思われます。その具体的な根拠として先生は、児童・生徒の理科・科学への関心が低いこと、科学的な概念の理解が十分でないこと、中学生対象の調査でも、科学が有用なものであるということの理解が弱いこと、高校生対象の調査では、理数系を学ぶことの意義が理解されていない、将来の職業として科学・技術関係の職業を選ぶことへの関心が低いこと等をあげています。

特に先生は、科学的概念の理解力が低いのは、目に見えない科学的事象を具体的に理解する力が不足しているためであると捉え、その具体的な方法をどうするかということに一貫して関心を持ち続けて研究に取り組んできています。

中学校勤務の時には、化学変化が化学式で表現されることを具体的に理解させるために、特に

視覚的モデルづくりに努力しており、これは生徒の理解を進める上で効果的であったことが実証されており。

先生は、次に、中学校勤務時に工夫・開発した実に豊富な方法上のアイデアを、今度は小学校の理科の授業で実践しています。児童の理解力を高める可能性という点では、相当にレベルの高い授業であると思われました。

先生の工夫は実践の至る所に溢れていて、研究熱心さということ以前に、生徒の理解を増すために様々な工夫をすることに大変熱心に取り組んでいることが窺えました。先生に限らず、受賞された先生方に共通する資質は、児童・生徒が分かったときの喜びを自らの喜びにできるという教師としての優れた資質の持ち主であることが読み取れたことです。

(3) 優れた研究に共通することー積み重ねのある研究であること

正木先生の研究で特筆すべきことは、実践をひとつひとつ着実に積み重ねてきていることからくる研究の厚みを感じられることでした。これはこの後の(4)で審査委員一同の感想や意見の中でも改めて取り上げます。

なぜ検証実践の厚み（あるいは観点や対象を変えての検証の繰り返し、あるいは簡単に「正しい」とか「明らかになった」と決めない慎重さ、そのために繰り返し検証のための実践を行うこと等々）が大事などと当たり前のことを言うのか。それは、中に実践の厚みがあまり感じられない論文があるとの印象をもっているからです。研究の積み重ねのある研究が少なくなってきたはいないか。検証の実践が少なく簡単に要領よくまとめた研究が増えてきてはいないか。言い換えれば、研究テーマを立て、仮説をつくり、その検証を僅か1,2度の実践でサラッとすませ、体裁よくまとめるという研究が少ないのではないかということだと思います。

教育研究では、教師の働きかけと児童生徒の行動の変化の間になんらかの因果関係を見出そうとしたり、あるいは児童生徒の行動の変化の中になんらかの関係性や規則性を見出そうとするわけですが、多様な要因が複雑に作用し合っている教育事象の中でその関係性、規則性を発見することは簡単ではないはずです。研究をすることとは、いろいろな要因が絡まっている教育事象を、要因をひとつひとつ解きほぐしコントロールすることで何と何がどう関係しているかを整理していくプロセスだと思います。教育論文を書くという営みは、そのプロセスを客観的に記述することでもあるわけです。言い換えれば、何かを明らかにすることとは、それだけ多くの検証の作業を伴うということ、つまり教育実践に相当の厚みが必要になるということなのです。もちろん、実践のボリュームがたくさんあればそれだけで研究は合格だということでは決してありません。しっかりした研究計画のもとで行う検証のための実践は自ずと絞られてくるはずだからです。ただ近年、実践をサラッとすませた研究が若干あるという感想が出てきていることに留意して頂きたいと思います。

(4) 審査委員の指摘事項

次に、今年度の審査を通して審査委員から指摘のあった事項の中からいくつか紹介しておきたいと思います。いずれもとても重要なことだと思います。

- ① 研究のねらいや仮説がなく、何を明らかにしようとしているのかはっきりしない論文があり読みにくかった。これは研究計画が十分でないことを意味している。自分の考えを整理しながら何を明らかにしたいのかをクリアにしてほしい。
- ② 研究とは仮説の有効性や正しさを実証するために行うものである以上、仮説をいくら立てても、その仮説が有効かどうかの実証がなされていないならば、仮説は形だけのものに過ぎない

ということになってしまう。

- ③ 仮説の検証作業としてアンケートを実施することが少なくないが、いつ、どこで実施したのか記述していない場合があり、客観性、信頼性の保証という面でも大事なことなのできちんと書いて欲しい。また、ごく僅かな児童生徒を対象とするアンケートでパーセントの多い少ないで教師がやったことが正しいか正しくないかを判断することには慎重であるべきで、児童生徒の行動の変化を多面的多角的に読み取れる力量を身に着けて欲しいこと。
- ④ 実践はしているが、それについての考察と反省がなかったり不足しているために、読み手にとっては説得力が感じられない。
- ⑤ 参考文献にいわゆるしっかりした書物、文献があげられていないことは、研究のバックグラウンドの深み、厚みと関わってくる。この筆者はよくものを考えていると思わせる人は読書量も多い。最近ではネットで検索した誰かが書いたものをコピー&ペーストする傾向があるが、やはり自分で本を読んで欲しい。それと関わって、できるだけ先行研究を探し、目を通した上で、自分は誰の研究の何を研究のスタートにするか決め、それから研究計画を立てて欲しい。
- ⑥ 全体として資料が多すぎる。溢れすぎているという感じで、これは言い換えれば、読み手に読んで貰うという姿勢に欠けていることだと思う。資料をもっと絞って欲しい。
- ⑦ うまくいった成功実践の事例しか取り上げられていない感じがする。むしろ失敗した事例を徹底的に検証するという姿勢の方がもっと大事だし生産的だと考える。
- ⑧ 研究の概要がないもの、目次やページが付されていない研究論文がいくつもあった。これらのことは論文の執筆に当たってのイロハなのできちんと踏まえて欲しい。
- ⑨ 応募要項を最初から最後までしっかり読んでから、論文作成に入ってほしい。

以上、各委員からの期待を込めての指摘、率直な感想を紹介しました。これらのことを参考に、是非、これからも教育弘済会が募集する研究論文募集に応募して下さることを心から期待しています。